

エリフの登場とヨブ記における位置づけ

「ヨブ記」からの説教 No.6

【聖書箇所】 32章1節～37章24節



主要聖句: 33章12節

「・・・このことであなたは正しくない。神は人よりも偉大だからである。」

ベレーシート

●32章～37章には**エリフ**という人物が登場します。多くの学者がこのエリフの語った部分は本来のヨブ記にはなかったもので、後から挿入されたものとして扱っています。しかし聖書は、正典としてまとめられたありのまままで読む必要があります。とすれば、エリフの登場はヨブ記全体にどういう意味をもたらしているのかということになります。その視点を持ちつつ瞑想していきたいと思います。

1. エリフが登場した理由(介入理由)

【新改訳改訂第3版】ヨブ記 32章1～5節

- 1 この三人の者はヨブに答えるのをやめた。それはヨブが自分は正しいと思っていたからである。
- 2 すると、ラム族のブズ人、バラクエルの子エリフが怒りを燃やした。彼がヨブに向かって怒りを燃やしたのは、ヨブが神よりもむしろ自分自身を義としたからである。
- 3 彼はまた、その三人の友に向かって怒りを燃やした。彼らがヨブを罪ある者としながら、言い返すことができなかったからである。
- 4 エリフはヨブに語りかけようと待っていた。彼らが自分よりも年長だったからである。
- 5 しかし、エリフは三人の者の口に答えがないのを見て、怒りを燃やした。

●32章1～5節は詩文体ではなく、散文で書かれています。そこになぜエリフが介入したのかその理由が述べられています。その理由とは、エリフがヨブとヨブの三人の友人に対して「怒りを燃やした」(33:2, 2, 3, 5)からです。エリフは「私の神は彼」という意味です。エリフはいつからか分かりませんが、ずっとヨブとその三人の友人たちとの対論に黙って「耳を傾けていた」のです。ところがそのエリフが「怒りを燃やした」(=義憤を感じた)のです。その理由は以下のとおりです。



- (1) ヨブが神よりも自分自身を義(正しい、潔白)であると主張したこと。
- (2) 三人の友人たちがヨブを罪ある者としながらも言い返せなかったこと。

●エリフは、自分は年も若く、年の多い者が知恵を教えると思い、自分の意見を述べることをずっと遠慮していました。しかし、エリフは年長者だから知恵を語れるというわけではないことを知り、むしろ、神の霊(「ルー

アツハ] הַיָּהּ)、全能者の息(「ネシャーマー」 הַנְּשָׂמָה)が人に悟りを与える(32:8)のだと確信し、神の霊に導かれて自分の意見をあえて語ってみたいと思ったのです。

32:18 私にはことばがあふれており、
一つの霊が私を圧迫している。私の腹を。

32:19 今、私の腹は抜け口の無いぶどう酒のようだ。
新しいぶどう酒の皮袋のように、今にも張り裂けようとしている。

ちなみに、新共同訳は以下のように訳しています。

「言いたいことはたくさんある。腹の中で霊がわたしを駆り立てている。」

●自分の語ることは真心からのものであり、真の知識だと自負して語られた内容が33章～37章の内容です。これはかなり長い弁論ですが、今回は、多少乱暴ですが、このエリフの弁論を一括りにして取り扱ってお話したいと思います。

2. 33章におけるエリフの主張

(1) エリフの主張は「霊」と「息」によるもので、他意がない

●さて、口を開いて語るエリフのことばに耳を傾けてみたいと思います。32章21節でエリフは「私はだれもひいきしない。どんな人にもへつらわない。」へつらうことを知らないから。」と述べながら、彼の発言の拠り所を「私の言うことは真心からだ。私のくちびるは、きよく知識を語る。(なぜなら)、神の霊が私を作り、全能者の息が私にいのちを与える(からだ)。」としています。32章8節で語ったことをここで再び繰り返して語っていますが、預言者、ないしは、一人の知恵者としてヨブを説得しようとしています。

(2) 神はいろいろな方法とある目的をもって語られている

●33章12節でエリフはヨブに対して「このことであなたは正しくない」と明言します。実はここからがエリフの言わんとする本論です。「このことで」とは、ヨブが自分はきよく背きの罪を犯さなかったこと。自分は純潔でよこしまなことがないこと。それなのに、神は・・・」と言っていることです。つまり、神が沈黙して答えて下さらないと文句を言っているヨブに対して、人が答えるように神が答えることを期待している、そのところにそもそも間違いがあるとしています。

●エリフに言わせるなら、神はいろいろな方法で何度も語っているのに、人間がそのことに気づかない(認めない)だけだとしています。「神は人よりも偉大である」という命題から出発するエリフは、神はそのあわれみのゆえに人に幻や夢の中で警告的なことを語るが、その目的は人を悪(高ぶり)から離れさせて(悔い改めさせて)、よみの穴に近づかないようにするためだとしています。もし人が神のメッセージに気づかずに聞き逃してしまう場合には、神は何度も人に苦しみ(痛み)を与えて気づかせようとされると語っています(19～24, 29～30節)。

(3) 神の愛による苦難の教育的価値の強調

●苦難を通して人が砕かれ、低くされて、神との正しいかかわりを回復することは、三人の友人たちの中のひとりエリファズも「全能者の懲らしめ」として語っていました(5:17~18参照)。しかしエリフの主張の新しさは、苦難は人がよみに近づくことなく、むしろ人にいのちの光を照らすためのもので、神のあわれみによって、それは何度でも(ヨブ記では「二度も三度も」と表現されている)繰り返されるというところにあります。つまり、人が苦難の教育的意義を悟るまで、神は何度も試練をお与えになるということです。

●ここで、33章23~24節を読みたいと思います。

【新改訳改訂第3版】

23 もし彼のそばに、ひとりの御使い、すなわち千人にひとりの代言者がおり、それが人に代わってその正しさを告げてくれるなら、

24 神は彼をあわれんで仰せられる。「彼を救って、よみの穴に下って行かないようにせよ。わたしは身代金を得た。」

●ここに出て来る「ひとりの御使い」とは、ヨブに苦難の教育的意義を知らせる神の霊的存在で、人間の歩むべき「正しさを告げてくれる」存在です。「その正しさ」とは、27節にあるように、「私は罪を犯し、正しい事を曲げた」という悔い改めを意味しています。その悔い改めという善行が、24節の「わたし(神)は身代金(保釈金)を得た」という意味に解することができます。ただし、「ひとりの御使い」によって苦難の意義を悟り、苦難にどう対処すべきかを教えられる経験ができるのは、千人にひとりの割合だとエリフは語っています。

●苦難とは、滅びから救い出されるために、死の運命から救い出されるために支払われる身代金(代価)であるという解釈ですが、ヨブが自分の苦難を救いに至らせるための身代金として納得するためには、自分が滅びに値する罪人であるという自覚が必要です。つまり、人間の領域を越えた神の統治に対してさからう高ぶりの罪を、ヨブ自身が認める必要があるのです。そのために「ひとりの御使い」の導きが必要なのだとエリフは述べています。

3. エリフの言わんとする主張は何か

●32~37章におけるエリフの長い弁論をここでまとめてみたいと思います。つまり、エリフの言わんとする主張を一言でいうならばどういうことになるのか。それが実は難しいのです。エリフは、神に関して、しかも多岐にわたってすばらしい事を語っているのですが、ある意味、混乱させられるのです。

●エリフの弁論に対してヨブが一切反論せず、沈黙しているのはなぜなのでしょう。エリフの弁論のすべてをヨブが受け入れたからなのでしょう。それとも、ヨブの心情とズレが生じているために、これ以上対論しても無駄だとヨブが感じたのでしょうか。いずれにしても、ヨブの沈黙は謎です。

●エリフが語った神のあわれみによる苦難の教育的価値については了解できます。そしてそれは真理です。しかし、そのあとにエリフが語っている事柄はなかなか整理がつかず、理解できません。エリフはヨブが語ったことばを取り上げて語っていきませんが、時折、ヨブの語ったことばを誤解している面もあります。一見ヨブの理解者であるように見えながら、突き放している面もあります。この混乱さこそがエリフの弁論の特長と言えなくもありません。この混乱さをもたらしていることばとして、二つの箇所を取り上げたいと思います。一つは、33章12節の「**神は人よりも偉大であるからである**」ということばです。もう一つは、37章23節にある「**私たちが見つけることのできない全能者**」というフレーズです。それぞれ原文を見ながら瞑想してみたいと思います。

(1) 33章12節の「**神は人よりも偉大であるからである**」というフレーズ

| | | | |
|-----------|----------|---------------|-------------|
| メーエノーシュ | エローハ | イルペー | キー |
| מֵאֲנוּשׁ | אֱלֹהִים | כִּי־יְרַבֵּה | |
| 人間より | 神は | 偉大である | なぜなら ～から |

●ここで注目すべきことは「偉大である」と訳された赤色の部分の動詞「ラーヴァー」(רַבָּה)です。意味としては「大きくする、増し加える、増やす、多くする」です。物質の数や量や能力や回数などの増加、拡大のニュアンスです。宇宙的な広がりやニュアンスのゆえに、人間が立ち行かない神秘が隠されているように思います。あまりにも人間の基準や思いを超越していて、神を求めようとすればするほど見出すことのできない神秘、神に近づこうとすればするほど理解できないことが多くなってしまいます。そのようなニュアンスが、この「神は人よりも偉大である」というフレーズの意味ではないかと考えます。

(2) 37章23節の「**私たちが見つけることのできない全能者**」というフレーズ

| | | |
|--------------|-------|--------|
| メツァーヌファー | ロー | シャツダイ |
| מִצְאָנוּהוּ | לֹא־ | שָׂדַי |
| 私たちが彼を見出すことは | (否定辞) | 全能者 |
| | ～できない | |

●ここで注目すべき点は、まず「全能者」を意味する「シャツダイ」でことばが切れていることです。そして、その後に、「私たちは彼を見出すことはできない」とあります。なぜなら、全能者の力においても、その義においても、その統治においても、その神秘を見出すことはできないと語っているフレーズです。にもかかわらず、エリフは神について実に多くのことを語ろうとしたのです。

●「マーツァー」(מָצָא)は「見つける、見出す、出会う」という意味です。聖書で最初に使われているのは創世記 2 章 20 節です。そこには、「すべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけたが、人にはふさわしい助け手が、見つからなかった。」とあります。「ロー・マーツァー」(לֹא־מָצָא)です。人にとって最も必要とするもの、最も大切なものが、自らの力で見出すことができないという地的現実が創造の当初からあったのです。「そこで神である主が、深い眠りをその人に下されたので彼は眠った。それで、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。こうして神である主は、人から取ったあばら骨を、ひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れてきた。」(創世記 2:21~22)。そして「ふたりは一体となるのである」という感動的な神の創造のわざが記されています。ちなみに、「一体となる」という「一体」という言葉は、ヘブル語の「エハッド」(אֶחָד)です。神は「ひとり」、唯一も「エハッド」で、ゆるがない永遠の交わりを意味します。

●このエリフのことばは、私たち人間の知識では分からないことが神の世界にはあるという事実を意味しています。最も知りたい答えが見つからないのです。特に、苦難の問題についてはなおさらのことです。事実、38 章から主が登場してヨブに語りかけますが、ヨブの「苦難」とその原因について一切ふれられていないのです。これは驚きです。ヨブが最も知りたいことについて、神はなにも答えない。これが神の答えです。それゆえ主は、エリフに対して一言、「知識もなく言い分を述べて、摂理を暗くするこの者はだれか。」(38:2)と断罪しています。

●もっとも、この主のことばはヨブに語られたものであるとする解釈が一般的です。しかし「この者」とは、それまで語ってきたエリフと解釈することも可能です。とすれば、主なる神はこの一言でエリフを断罪したことになります。エリフの長い弁論は、神の「摂理を暗くする」つまらない話の連続にすぎなかったこととなります。とすれば、エリフの登場は、まさに主が、38~41 章において舞台上に登場するための「架け橋的存在」(位置づけ)にあるということになります。

●私たちはヨブ記の物語が、天的現実として、神とサタンとのやり取りがあったことを知っています。しかし地的現実の中にあるヨブを含めたすべての登場者にはそのことが一切知らされていないという設定があることを知らなければなりません。これは神が登場しても人間には知らされないままなのです。使徒パウロも人間の次元からその解決の光を得ようと知恵を求めたとしても、それを得ることができないのは神の知恵なのだと言っています。つまり、神ご自身が自ら至現(啓示)されない限り、私たちは神の世界の神秘(天的現実)を知り得ないのだということなのです。

●しかし、たとえそうであったとしても、「主は天から人の子らを見おろして、神を尋ね求める、悟りのある者がいるかどうかをご覧になった。」(詩篇 15:2)とあるように、神はいつの時代においても、神を尋ね求める者たちを捜しておられるのです。ただ、使徒パウロが言うように、「この世が自分の知恵によって神を知ることができないのは、神の知恵によるのです。」(I コリント 1:21)ということばも同時に、重く、そして恐れをもって受けとめなければならないのです。

2014.7.6